



堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

《祝 3年生大島さん、北区中学校連合学芸会英語スピーチコンテストで見事第1位、おめでとうございます！都大会も頑張ってください》



11月2日（金）に北区滝野川会館大ホールにおいて開催された令和5年度第77回北区中学校連合学芸会で、本校からは〈英語の部〉に3年生の大島さんが堀船中の代表として登壇して、とても素晴らしい英語スピーチを行いました。その結果、12校の各学校の代表の中で、なんと第1位に輝きました。本当におめでとうございます。

大島さんのスピーチは、発音の美しさが光る落ち着いた流暢な英語で、堂々とした姿がとても素敵でした。『Worlds from the Heart』というタイトルにふさわしく、「翻訳機に頼らずに自分の言葉で話す素晴らしさをみなさんに知って欲しい」という強いメッセージ性が込められた発表内容は、審査員の先生からも大絶賛でした。

これだけのものをつくりあげるにあたり、発表会までの練習は大変だったと思います。大島さん、本当にお疲れ様でした。北区一素敵な英語スピーチを聞かせていただき、どうもありがとうございました。

なお、大島さんは、北区の代表として12月26日（火）にたましんRISURUホール（立川市民会館大ホール）で行われる都大会に出場します。都大会も頑張ってください。



《令和5年度 栄町子どもセンター「きたっこパーク」が開催され、12名の生徒ボランティアのみなさんが頑張ってくれました》

11月11日（土）、令和5年度 栄町子どもセンター「きたっこパーク」が開催され、12名の生徒ボランティアのみなさんが頑張ってくれました。ボランティアのみなさんは、ゲームコーナーなどの各ブースで、夕方まで一生懸命働いてくれました。本当にありがとうございました。

12時30分に栄町ふれあい広場に集合して準備を行い、13時30分の開会式の後、13時45分から各コーナーがスタートしました。小さいお子さんの面倒をよく見ながら、快くボランティア活動に取り組み、会場を笑顔でいっぱいしてくれたボランティアのみなさん。本当にありがとうございました。



《祝 バドミントン新人大会 Bブロック大会、男子団体第3位、女子団体6位入賞、男女とも都大会出場！》



11月3日（金）、バドミントン新人大会 Bブロック大会団体戦が赤羽体育館で行われました。男子団体戦は3位入賞し、都大会出場が決定しました。女子団体戦は、6位入賞し、同じく都大会出場が決定しました。

男女ともに素晴らしい成績をおさめました。毎日の鍛錬の成果がしっかりと発揮されています。本当におめでとうございます。

《3組 職場実習を行いました》

3組は、11月7日（火）から10日（金）まで、3年生が職場実習を行いました。実習先は、木の実保育園です。普段の学校の授業では味わえない体験が多くあり、有意義な時間となりました。その一方で、慣れない実習先で気を遣ったり、体を動かしたりしたため、大変だったと思います。本当にお疲れ様でした。



《祝 3年生 濱崎さん 伊藤園おーいお茶新俳句で佳作に入選しました。おめでとうございます》

第34回伊藤園おーいお茶新俳句大賞の募集があり、192万1,404句に及ぶ応募作品の中で、3年生の濱崎さんが見事佳作に入選しました。すごいことです。本当におめでとうございます。濱崎さんの作品を紹介します。

「走り抜く 新幹線は 雪の中」

津田梅子の生き方（7）～帰国後のカルチャーショック～

梅子が帰国した時には、実家は麻布に転居していました。「我が家」に辿り着き、家の扉を開けた梅子は、アメリカでの生活そのままに靴を脱がずに上がっていきます。これには家族も驚いて、靴を脱ぐように梅子に告げたそうです。約11年の歳月の中で、梅子は日本の習慣もすっかり忘れてしまっていたのです。また、家族と会話する時も、海岸女学校（現在の青山学院大学の源流のひとつ）を出た姉の琴子か、通訳経験の豊富な父・仙を介さないと、梅子のお話は伝わりませんでした。

11年ぶりの日本で、梅子は他にもさまざまな苦勞をすることになりました。帰国後間もないある日曜日、築地にある教会の礼拝に出席した帰り道のことです。人力車に乗っていた梅子は、教会に忘れ物をしてしまったことに気づきました。しかし日本語を話せないの、車夫に話しかけることができません。梅子の葛藤などつゆ知らず進む人力車に気を揉んでいるところに、向こうからやってくる顔見知りのアメリカ人の姿を認めました。梅子は声をあげてそのアメリカ人を呼び止めます。日本に長くいるため日本語を話せるこのアメリカ人に通訳をしてもらうことで、梅子はやっと忘れ物を取りに行くことができました。その後もこのアメリカ人には何度か助けられた梅子でしたが、会うたびに「アベコベです」とからかわれた、というエピソードもあるようです。

このように、言葉の通じない母国・日本での生活に苦戦する梅子でしたが、「アメリカ人の目」を持っていることで、当時の多くの日本人が見えないものを見ることもできました。それは、強力な家長父長制の存在です。

日本の家では常に父親が一番で、家の後を継ぐ長男や養子が二番、続いて弟達（男子）が偉く、食事もお風呂も何事においても優先される。母親は、父親（夫）はもちろんのこと、長男にも付き従うため、女性の全てが男性の言いなりになっている。しかも女性達はそれを当然として受け入れており、疑問を抱いている様子もありませんでした。梅子も自分の財布を持つことが許されず、何か買う時には父親の許しを得なければならなかったのです。

アメリカの解放的な家族生活を当たり前にして育った梅子は、母国の女性の生き方に大きなカルチャーショックを受けることになりました。父親の希望に沿ってアメリカで中等教育を受けて、しかも優秀な成績を収めて帰国したのに、一人前の女性はおろか、一人の大人、一人の人間としてすら扱ってもらえない。それが何よりショックでした。また、せっかく幼くしてアメリカまで行き、長い時間をかけて様々なことを学んだのだから、その経験を活かして活躍したい。アメリカの女性達のように、社会に出て仕事に就きたい。そんな当然の想いを抱いた梅子に対して、日本政府は報いてはくれませんでした。留学した男性達の多くには帰国後に官職が与えられていたのに、一緒に留学した女子留学生には、社会の中で活躍する道が当然には用意されていなかったのです。



築地 海岸女学校
（現在の青山学院の源流）跡

一方で、一足早く帰国した永井繁子は、1882年3月にはアメリカで学んできた音楽の技能によって文部省音楽取調掛に採用され、留学中から縁のあった海軍士官の瓜生外吉と結婚しました。その披露宴に出席した山川捨松もまた、会場で知り合った陸軍卿の大山巖に見初められ、結婚することになりました。梅子からしてみれば、自分や捨末は、苦勞してアメリカで積んできた経験をまるで活かせていないように見えました。

そんな梅子でしたが、帰国した翌年の1883（明治16年）に、築地にある海岸女学校で英語を教える機会を得ます。これは2ヶ月契約の夏の短期講習のようなものであったので、教える練習のつもりで引き受けました。その後契約の更新を打診されますが、梅子は断っています。貧しい生活をしている生徒に比べてアメリカ人宣教師が贅沢な生活をしているように見えたことや、日本人が蔑視されているように感じたこと、アメリカ人と自分の給料に差があったことが要因と言われており、そこには、梅子の理想とはほど遠い当時の日本社会の現実がありました。

梅子は、ありあまる若さと能力を有しながら、行き場のない悩みに苦しむことになります。



和服を着た梅子（18歳頃）

【提供】津田塾大学津田梅子資料室